
綿帽子

篠義

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

綿帽子

【コード】

N0074Q

【作者名】

篠義

【あらすじ】

知り合いから「綿帽子」というお題で、関西夫夫と命じられたお話です。

関西夫夫

関西弁で、字書きはできるのか？ で、はじまった、このお話。

意味がわからない言葉があれば、連絡ください。ははははは。

社員には制服がない。その代わり、スーツ着用なのだが、これが結構、金がかかる。安物は所詮、安物なので、すぐに形が崩れてしまうのだ。夏物は、元から皺になりやすいから使い捨てていくほうが効率的だが、冬物は、そうはいかない。寒いから、それなりの生地で誂えな　いと、本気で寒い目に遭う。

「うえーむっちゃ寒いっつ。」

仕事から帰ってきた花月が泣き言を言いながら、部屋に入ってきた。今夜は課内の宴会で、俺より遅くなった。また、雨で寒いところへダメ出したような天候だった。

「やつぱり、一着一万円のスーツと、一万円のコートはあかん。」

「当たり前じゃっつ。せやから、俺が買うたるって言うたやないか。」

「あかんあかん、そんなんせんでもええ。」

いや、実際のところ、俺も、それほど給料があるわけではないから、いや、それでも公務員の花月よりは、ちよつと多いので、一着誂えてやろうと考えていたのだが、こいつ、真っ向から反対した。もうすぐ、ハイツの更新がある。そのための金を残しておいてくれ、と、現実的　なことを言ったからだ。更新自体は金がかからないのだが、保険料と手数料は支払わなければ　ならない。これが、五万近い金額だから、その分をキープしておけ、ということらしい。

「なあ、せめて、コートだけでもえ。」

「もうちよつとしたらバーゲンになるから、それから買うわ。．．．それより、人肌で温めて　や？　水都。」

ぴとつと背後から抱きつかれて、その冷たさに、俺まで震えた。

コートが濡れていて冷たい　のだ。すかさず、やつの額にデコピンをかまして、「風呂で温もれっつ。」と、追い立てた　。

どちらも就職一年目は、何かと入用で、なかなか貯金まで手が廻らなかつた。たかが五万。されど五万。それは、とりあえずキープしてあるが、それ以上にはない。かくいう、俺も、三万のコートと、一万円のスーツだから似たようなものだ。いや、俺はいいのだ。もし風邪をひいたら、花月が看病してくれるし、外回りのない仕事だから、寒ければ、大人しくしていれば済む。花月の場合は、外回りもあるし、何より暖房費節約とやらで、室内でも寒いらしいのだ。

「なあ、みつちゃん、バイトせえへんか？」

そんな時に、悪魔の囁きが響いた。言わずと知れた俺の上司だ。金がない、金がないと文句を吐いていたら、唐突に、そんなことを切り出した。

「なんや？ ケツ貸すバイトか？」

「・・・身も蓋もない・・・わし、みつちゃんを、そんな下品に育てた覚えはあらへんで。」

「育てられた覚えなんかあるかいっつ。」

「まあ、聞け。一日、黙って言うこと聞いてくれたら、三十万。」

「二十四時間か？」

「いや、拘束時間は・・・たぶん、十二時間くらいやろ。」

「ゲイビデオかなんかか？ おっさん。花月にみつからへんねやつたら、かまへんけど。」

一日で、それだけの稼ぎとなれば、普通ではない。十二時間ということは、時給二万ちよいと言え、そういうもんだらうと、俺は思った。みつからなければ、問題はない。貞操とかいうものは、俺の内には存在していない。

「あほか、なんで、おまえに、そんなことせなあかんねん。それやったら、わしが直接、お持ち帰りするがな。ちゃうがな、わしの知り合いの女装クラブの宣伝ポスターとプロモーションビデオの撮影があるねんけどな。そのモデルや。」

「ん？ なんや、バニーちゃんとかか？」

「・・・おまえ、とことん、わしのことを変態やと思つとるやろ？」

「おう、百パーセント思つとるよ。」

なんで、そんな下品なことばかり言うかなあーと、おっさんは嘘泣きしつつ、説明はしてくれた。世の中には、変わった趣味の人間がいて、その欲望を満足させるための店というのもある。女装クラブというのは、男性でありながら、女性のような格好をしたいという変わった人が来る店だ。そこで、思い思いに女装して、仲間と親交を深めたりするらしい。で、まあ、こういうところは秘密裏にある場所だが、それなりに宣伝しないと廃れてしまうから、それなりの場所で宣伝を打つ。昨今では、ネットが、その主流だが、やはりインパクトのあるものが好まれる。しかし、お客様の姿を晒すわけにはいけないので、その宣伝にはモデルを使うのだ。

もちろん、モデルも、なるべくなら知名度のない人間が好ましい。無名の俳優や役者などは、そこから情報が漏れてしまうことがあるので却下されているらしい。

「つまり素人で、そこそこの男つてことか？」

「そういうことや。おまえなら、見栄えは悪くないし、金さえ払ったら、女装でもなんでもありやしな。ひとつ、ボランティアやと思つてやってくれへんか？」

「金は先払いやったらええで。それと、ウィークデーにしてくれ。」

休日に、仕事関係で出かけると言うと、花月が、仕事場へお迎えに来る場合がある。職場にいないのが、バレたら追求されるのは目に見えている。金は臨時収入ということで言い訳が出来る。ちょい

と大事の仕事をクリアしたともいえば、俺の仕事を理解してない花月なら、簡単に騙せるだろう。

「おう、そっちはかまへんで。ほな、あちらさんの都合がいたら、連絡して貰う。」

化粧されようと、バニーちゃんな格好をさせられようと、金があれば、別にいい。笑うのは、俺が知らない人間なのだから、別に、俺は気にならない。これで、冬物コートとスーツを買える、と、俺は、そちらのほうを楽しみだった。

堀内のおっさんは、ただいまは中部にある本社勤務だ。一ヶ月に数日、関西へ戻ってるが、その間に、こちらで溜まっている仕事を片付けている。その合間に、予定は組み込んだらしく、水曜日に、

「ほな、デートしようか？」と、俺の前に現れた。

「ちよお、待て。これだけやってく。」

「ああ、区切りまでしとけ。今日は、戻られへんから覚悟しとけよ、みっちゃん。しっぽり、おっちゃんとデートやさかいな。」

こんなことを言うから、俺が、堀内のおっさんの愛人だと噂されるのだが、それは、それで有り難いので、スルッと無視だ。この噂のお陰で、女性陣から声をかけられることもないし、余計な因縁をふっかけられることもない。

連れ出された場所は、結構大きな神社だった。それも、俺でも知ってる有名どころだ。こんなところでやって通報されるんと違うんか？ と、心配したが、どうやら、ここの神主たちも、そこいらは理解があるらしい。相手は、そのままでも充分、イケメンのおっさんが三人で、分厚い封筒を差し出された。

「いやー引き受けてくれてありがとう。こつというのは、なかなかしてくる子がおれへんでなあ。」

「それに、堀内さんの愛人さんが見られるって聞いて、大騒ぎやったんや。」

封筒の中身は、ちゃんと札束が詰まっていて、一応、確認のために数えた。きつちり三十枚の万札を手にして、「おおきに。」と、俺も頭を下げた。たかだか、女装するだけで、これだけの大金をくれるなら、どんな格好でもするし、と、俺は内心で大喜びする。

「とりあえず、化粧と着付けしてもらって、それから、ビデオの撮影と写真。それが終わってから、うちの店で、パーティーするから、それまで頼むわな。」

昼の正午から夜の零時まで、十二時間の拘束だ。それは、最初から言われていたから、こちらも頷く。じゃあ、と、社務所へと招き入れられて、ちよつと焦った。そこに置かれていたのは、白無垢だったからだ。

「え？」

「あれ？ 聞いてへんかったん？ 仮の神前式をビデオ撮影させてもらうんよ。」

「ああ、そうですか。」

まあ、高額バイトだ。何があっても驚かない。もっと、えげつないものだと思っていたから、逆にびっくりした。

着付けの前に、襟足と足の脛毛は、きれいに剃られた。それから、化粧されて、白無垢を着付けられた。

・・・花月が見たら、絶対に暴れるわ、これ・・・

常々、結婚式をやりたいたとか、ぬかす花月は、二人揃って白の燕尾服で教会で式をあげたいという夢を語っている。男同士で、それをやる勇氣は俺にはない。けど、これだったら、傍目には、俺は女にしか見えないだろうから、花月と式ができるんじゃないか、と、ちよつと思つた。いや、思つたが、やりたくはない。あいつ、絶対に腹を抱えて爆笑するだろうからだ。白無垢は、かなりの重量があるの、普通は、本格的には着せないのだという。今回は、俺が男だから、本気で本格的な設えになっているとのことだ。鬘も、相当の重量があるし、その上に 綿帽子をすっぽり被されてしまうと、ちよつと歩くだけで、しんどい代物だった。そら、誰もやりたがら

ないだろう。

「おお、ええ感じじゃないか、みっちゃん。べっぴんさんの花嫁御寮やわ。」

堀内のおっさんの声がしたから、そちらへ顔を向けたら、紋付袴のおっさんが、扇子でしばしばし手を叩いて笑っていた。

「なんや、おっさんもビデオに出るんかいな。」

「当たり前やろ。みっちゃんの花嫁さんは、わししかおらへん。」
「げっ」

「何が、『げっ』やねん。神前式やって言つたやろ？ 相手がおらんと意味あらへんがな。・・・沢野はんも来たがつてたんやけどな、都合がつかへんで齒軋りしとつたで。あははははははは。」

ほな、準備も出来たし、やりまひよか？ と、おっさんが背後に声をかけると、介添人が俺に近寄ってきて、椅子から立たせた。そして、着物の裾を始末して、俺に、その端を持たせる。

「よろしいですか？ ゆっくりでよろしいから、一歩ずつ確実に歩いてください。花嫁さん、歩調は花嫁さんに合わせてくださいね。」

・・・花嫁さん？・・・あ、このおばちゃん、知らんのかいな・・・

喋つたら一発でバレる。だから、俺が口を噤んでいたら、その介添人のおばちゃんは、がはははと豪快に笑った。

・・・え？・・・

「堀内さんも隅には置けへんで。こんな可愛い子を隠しとるやなんてな。」

「わしの掌中の珠じゃ。おまはんらなんかにお披露目しとつはないで。今回は、たまたま、佐久間さんが頭下げてきやはったから、泣く泣く出すんやからな。」

地声になったおばはんは、男の声だった。顔を上げたら、どこかが不自然な黒留袖の女装したおっさんだった。

「ありや、ほんまに可愛い子や。」

「・・・え・・・」

「ああ、ああ、心配せんでも出席者も巫女さんも神主連中も、みんな、ご同類さんがやるから気にせんでええからね。」

いや、俺は、ご同類やないて、おっさんと、内心でツッコみつつ、前へ誘導された。そのまま社務所の玄関から外へ出ると、神主と巫女さんが並んでいた。確かに、若い、胸のない巫女さんたちだ。

笙、箏、横笛の神楽たちが、まず先頭になり、その鳴り物を鳴らしつつ、本殿へと向かう。次に神主が三人。衣装からすると、偉い神主が一番、それから二番手、三番手が続く。次に、胸はないが、そこそ若くて見栄えの良さそうな巫女さんが二人、そして、俺と堀内のおっさんが、ゆっくりと、それに続いて、さらに、その背後に、巫女がふたり、最後に親族役の人間という行列が出来上がっていた。この親族も、みな、女性ばかりだ。いや、女装したおっさんとお兄さんだった。黒留袖、色留袖、振袖、訪問着、という派手な着物で着飾っている女性みたいな人間だ。それなりに性別がわからないのもいるが、あからさまに見るだけでキツイのも混じっている。さつき挨拶した依頼人たちも、見事な女装をしていた。

「・・・あんだ・・・どういう趣味なんや?・・・」

「わしは、趣味やないで。知り合いが、そうやから、たまにクラブへ飲みに行くだけや。」

「花嫁さん、おしゃべりしたらあきませんで。」

背後から、俺の着物を持ち上げている介添人が、こっそりと注意するので、俺も黙った。

本格的な神前式なんてものは、俺も見たことがない。せいぜい、結婚式場でやってるのを、テレビで見るぐらいのことだ。拝殿に向かって左右に分かれて、俺と堀内のおっさんが着席すると、親族役も、その背後にある椅子に座った。

それから神主の祝詞があげられて、神楽の音色で、巫女たちが奉

納舞をする。もちろん、それらはカメラマンによって、写真とビデオも撮られている。再び、神主が祝詞をあげると、巫女たちが、俺たちの前にやってきて、ふたりを拜殿に向かつて並んで立たせた。四人の巫女が舞うように、杯を、俺に差し出す。一番上の小さいのを取ると、そこに酒が、少し注がれる。

・・・これ三回で飲むんやな？・・・

常識として、それは知っていたが、さすがに、それはやりたくないくて、一度で飲み干した。

これは、神前で男女の繋がりの意味する儀式だ。三度同じ杯で、三回に分けて飲み干す。それが、婚姻の契りの意味するのだ。俺は、それを、花月以外とはやりたくないから、作法を無視した。となりの堀内のおっさんは、それを見て微笑んで、同じように一度で飲み干す。これは

、ただのプロモーションビデオだ。俺は、すでに結婚しているから神様に誓う必要はない。だから、一度で飲み干したのだ。

三度、杯を差し替えて、それは執り行われて、その度に、俺も堀内のおっさんも一度で飲み干した。

それから、神主が、また祝詞をあげて、俺たちの前で、白い紙のついた棒を、ふらふらと振った。

それが終わると、また左右に分かれて座り、親族の固めの杯というのが行われる。婚姻というものが、血族と血族を結ぶものという古いしきたりに添ったものだ、こういうことになる。親族役が、それを飲み干して、懐に、その杯をしまうと、神主が、「これにて、両家の婚姻は、神前にて結了いたしました。」と、最後の言葉を告げた。

・・・終わった・・・意外と長いもんなんやなあー・・・

「おまえらしいわ。」

ちよつとぼんやりしていたら、堀内のおっさんが俺の横に立っていた。

「何が？」

「

「三々九度はできひんって拒絶したやる？　こんな遊びでも操を立てるところが、みっちゃんらしい。」

「あたりまえじゃ、なんで、おっさんと婚姻の杯なんか交わさんとあかんねん。」

「あのボケにはもつたいない。」

「じゃかましい。」

いつものように会話していたら、慌てて介添人のおばはんみたいなおっさんに止められた。これから写真撮影をしますので、と、カメラマンもやってくる。

拜殿の前に全員が揃って、写真に納まった。それから、社務所で白無垢と綿帽子を取って、色内掛けになってから、もう一度、境内で撮影する。さらに、今度は、色ドレスなるものに着替えさせられるから、女装クラブのほうで、披露宴もどきが行われた。そこにいるのは、やっぱり男ばかりで、でも、着ているものは女物という異様な場所だった。堀内のおっさんは、知り合いから祝福の言葉なんかかけられていたが、その頃には、俺も疲れていて、おっさんの腕にしがみついているのでやっとだった。夜の十二時にお開きになって、着替えて化粧も落としたら、一時を越えていた。

「延長料金も払るたるか？」

「・・・いや・・・ええ・・・頼むから、タクシー呼んで。」

一日、とつかえひつかえに着替えさせられて、慣れない着物やドレスに四苦八苦しただ俺は、　どろどろに疲れていて、タクシーで家まで帰ると、その日は、そのまんま沈没した。

・
・
・

こんなふうになったで、と、後日、堀内のおっさんが、そのホームページのアドレスをメールで送ってきた。賑やかな結婚式の模様が、ちゃんと編集されて、ホームページの表紙を飾り、中には、そ

付袴の堀内と、文金高島田に色打ちかけの水都が、ふたりして微笑んでいる写真と、「結婚しました。」の文字は、さすがに普通ではない。

・・・あいつ・・・なんの仕事してるんや？・・・

隅っこに、堀内の手書きで添えられた、「ほんのジョークやから、夫夫喧嘩すんなよ？」の文字がなかったら、俺は水都に本気で詰め寄っただろう。

・・・もしかして・・・臨時収入で、これか・・・

先頃、水都が臨時収入が入ったから、と、スーツとコートを買ってくれた。たまに、特別手当がつくような仕事があることは、俺も以前から知っていたが、いつもは一万、二万という単位だった。それが、かなりの高額だったことは不審には思っていた。堀内のおっさんとツーショットの写真を撮るだけではないんだろう。何かしら、それ以外にもあったから、その収入だ。

・・・こんな撮るくらいやったら、俺と撮ってくれたらええのに・・・

水都は、写真が嫌いだ。思い出になるものなんか欲しくないと、写真一切を撮らない。だから、俺も、それは諦めていた。それなのに、これだ。後で、しばいでも白状させたらうと思って、その葉書はこたつの上に叩きつけて置いた。

「ただいまあー」の声がして、「なんじゃあつっ、これはあああああああ」という怒鳴り声

が響いた。ああ、なんかびっくりしてるなーと台所から顔を覗かせたら、俺の嫁は、ぐしゃぐしゃと、その葉書を千切ってゴミ箱に捨てていた。

「水都、それな。俺宛やってんけど？」

「・・・俺、ちよつと出てくる。」

「はあ？ どこ？」

「うーん、往復四時間、いや、三時間かな。あ、花月は寝てや。」

「いや、待てい。」

すちやりと携帯を取り出した水都は、「車貸してくれ。急用がでけたんや。．．あ？．．これからじゃっつ。おまえのが一番足が速いやろ？ 心配せんでもガソリン満タンで、エンジンもええ色に焼いて返したるわいっつ。」と、相手がびびるようなことを言つて、携帯を切る。カバンを放り出し、ネクタイを緩めると、俺に、ものすごい笑顔を向けた。

「ごめんな、花月。ちよつと、あのくそボケと語りたいたいことができなから、行つて来るわ。」

「いや、それはええねんけど、あのな、水都。あれな。」

「うん、ちよつとしたバイトや。気にせんでも、ケツ貸したりしてないから。．．．おまえだけやからな。」

じゃ、行つてくるわ、と、素晴らしく爽やかな笑顔と、怒りマークが三個くらい額に浮き出た状態で、水都は、カンカンと表の階段を駆け下りて行った。もう、それだけで、内緒のバイトだったことと大金の出所は知れた。往復四時間、かつ飛ばして三時間の場所にいるであろうくそボケのおっさんは、おそらく、明日、起き上がれないだろう。

．．．成仏せえーよ、おっさん。あんたが悪い。．．．

すでに、突つ走つてしまった俺の嫁を止めることは不可能で、さらに、俺には、あの爽やかな笑顔の怖い嫁を止めるつもりはない。

後日、堀内から、俺に、文句の電話が入ったが、それについては、すげなく切つて着信拒否にしてやった。たぶん、俺の嫁は、バイトしたことを知られなくなつたのだろう。それをバラしたおっさんに同情する気持ちは微塵もない。

ただ、しばらくして着信拒否を解除したら、堀内のおっさんが、「みつちゃんは三々九度だ。けは拒否しよつたわ。」と、笑いな

がら教えてくれたのだけは、よしよしよし。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0074q/>

綿帽子

2011年1月7日16時41分発行